訪問診療を待つ子どもたち

昨夏の戦争で、ガザでは2,131人（うち子どもが510人）が死亡、11,100人（うち子ども3,374人、女性2,088人、高齢者410人）が負傷、1,000人の子どもが生涯にわたる傷を負いました。WHOによると17の病院、50のクリニックが被害を受け、8つの診療所が全壊しました。封鎖によって医薬品・医療用品・医療機器・病院の収容能力が不足しており、医療を必要としている多くの人が十分な治療を受けられていません。
被害の特に大きかった地域ではアフターケアも足りません。完治しないまま放置され、障がいになるケースが目立っています。そのため医師、看護師、理学療法士、ソーシャルワーカーから成る医療チームを派遣し、負傷した約250人の子どもたちのアフターケアを行う訪問診療活動を5月から開始しました。

◆ リマス（5歳、ゼイトゥーン／表紙写真）とダリア（9歳）

2014年8月1日、家族は爆撃音で目が覚めました。近所へのミサイル攻撃が続き、避難できないままリマスと姉が負傷しました。リマスは爆弾の破片が右頭部を突き抜けて頭蓋骨の一部を損傷。しかし救急車が到着するまで何時間も待たされました。その後、4回にわたる頭骸骨手術を受けたものの、左半身に麻痺が残りまだ複数回の手術が必要です。バランスを取って歩けるようになるための理学療法も必要としています。姉のダリアも飛散した爆弾片で体中負傷してケロイドができ整形手術が必要ですが、ガザではそれができないし、国境が閉ざされているため他国での治療も受けられません。リマスは少なくとも2年間は筋肉を強める高価な薬を必要としており、両親は借金をせざるを得ませんでした。理学療法、定期的な包帯の交換、薬を飲み続ける方針で支援を続けます。

リマス　傷跡が痛々しい

ダリア（国連OCHA）

◆ カリム（12歳、ベイト・ハヌーン）

カリムの家は、何の警告もなくイスラエル軍に破壊されました。7階建ての建物は爆破され、父、妊娠中の母、12人の兄弟姉妹は瓦礫の下敷きになり、数時間後に救出されました。体中に爆弾の破片が入り手術が必要でしたが、病院は負傷者でいっぱいで、入院まで数日間待たされました。カリムは聴力も失い、ケロイドがひどく、また栄養状態も十分ではありません。補聴器、整形手術、サプリメントによる全般的健康状態の回復も必要です。

家族は避難所となった学校で10か月過し、ようやく5月にコンテナの仮設住宅に引っ越しました。狭いうえに金属製のため夏は焼けつき冬は凍える環境です。カリムは学校を退学してしまいました。肉体的にも精神的にも通学することが難しいのです。避難生活をしていたため、学校には悲惨な思い出しかなくなったのです。ガザの医療ニーズは非常に大きく、それを満たすことは不可能ですが、小さくても支援のひとつひとつが子どもたちの生活、健康、未来に変化をもたらすと信じています。

カリム「家があった。学校にも行っていた。でも今はなにもない。避難所にはもういたくない。仮設住宅も大っ嫌いだ。元の生活に戻りたい」